

# 内村鑑三『代表的日本人』の通読による 大衆性低減効果に関する実験報告

伊地知 恭右<sup>1</sup>・羽鳥 剛史<sup>2</sup>・藤井 聡<sup>3</sup>

<sup>1</sup>正会員 社団法人北海道開発技術センター 地域政策研究室(〒060-0051 北海道札幌市中央区南1条東2丁目11番地)

E-mail:ijichi@decnet.or.jp

<sup>2</sup>正会員 東京工業大学大学院理工学研究科土木工学専攻・助教(〒152-8552 東京都目黒区大岡山2丁目12番地1号)

E-mail:hatori@plan.cv.titech.ac.jp

<sup>3</sup>正会員 東京工業大学大学院理工学研究科土木工学専攻・教授(〒152-8552 東京都目黒区大岡山2丁目12番地1号)

E-mail:fujii@plan.cv.titech.ac.jp

これまでの先行研究において、オルテガの論ずる人々の「大衆性」が、土木計画における環境問題や公共事業合意形成問題に対して否定的な影響を及ぼし得ることが指摘されている。この結果を受けて、本研究では、個人の大衆性を低減するための方途を探ることを目的として、人々とのコミュニケーションを通じた態度変容施策の一つとして、「読書」の効果について検討した。そして、内村鑑三著『代表的日本人』(1908)に着目し、本書を通読することによって、人々の大衆性が低減するという仮定を措定し、アンケート調査を通じて本仮説を実証的に検証した。その結果、本研究の仮説が支持され、『代表的日本人』を通読することによって、人々の大衆性が低減し得る可能性が示された。

**Key Words:** *the vulgarity of the mass, Kanzo Uchimura "Representative men of Japan", attitude modification*

## 1. はじめに

近年、土木計画の対象とする領域において、違法駐輪や交通渋滞等の種々の交通問題<sup>1),2),3)</sup>を始め、伝統的な景観や街並みの衰退<sup>4),5)</sup>、総論賛成・各論反対等の合意形成問題<sup>6),7)</sup>に至るまで、様々な社会問題が深刻化しつつあることが指摘されている。これらの社会問題の原因は多種多様であると考えられるが、そうした社会問題はそもそも個人ひとり一人の態度や行動と深く関わり合うという点においては共通すると言って差し支えないものと思われる。そして、この点を鑑みれば、現在深刻化しつつある種々の社会問題の背景には、個人ひとり一人において、ものごとの善悪を判断する意識、いわゆる道徳心が低下している可能性<sup>[1]</sup>が少なからず懸念されることである。

人々の道徳心の問題については、これまで哲学、倫理学、心理学、社会学等、多くの学問分野において様々な議論がなされてきたが、とりわけ伝統的な哲学的論考の中心課題であり続けてきた。その中でも、特に近代における人々の道徳的頹廢の根源に「大衆人」なる存在のあ

ることが古くより論じられている<sup>8),9),10),11),12)</sup>。特に、スペインの哲学者オルテガ(1883-1955)はその著書「大衆の反逆」(1930)<sup>13)</sup>において、近代大衆社会にみられる価値喪失の中に、人間的生の否定や非道徳が胚胎していることを鋭い洞察を持って指摘している。オルテガの大衆論の特徴は、大衆を数量的な概念あるいは政治的・社会的階級として捉えるのではなく、万人に共通する「心理的事実」として捉えようとしたところにある。この点において、オルテガの論ずる大衆像は時代を超えた1つの普遍的な精神構造を提示したものであり、現代社会において、前述したような土木に関わる様々な問題を検討する上でも含意するところが少なくないものと思われる。

以上の問題について、羽鳥ら<sup>14)</sup>の先行研究において、オルテガ「大衆の反逆」に基づいて、個人の大衆性を測定する心理尺度が作成されており、大衆性が「傲慢性」と「自己閉塞性」という二つの因子から構成されることが示されている。ここに、傲慢性とは「ものの道理や背後関係はさておき、とにかく自分自身には様々な能力が携わっており、自分の望み通りに物事が進むであろうと

盲信する傾向」を表しており、自己閉塞性とは「自分自身の外部環境からの閉塞性」を表している。そして、この2つの心理尺度を用いて、個人の大衆性がどのような社会的影響を及ぼすかについての検討が加えられており<sup>15)16)</sup>、その結果、景観問題と公共事業を巡る合意形成問題について、人々の大衆性が否定的な影響を及ぼす傾向が示され、これらの問題の本質的課題の一つが、個人の大衆性という心理的傾向性にある可能性が指摘されている。

本稿では、以上の先行研究の結果を受けて、大衆性なる個人の非道徳的な心的傾向性を低減・抑制することを目指し、その方途を探るために行った実験結果について報告する。本実験は、大衆性低減策の一つとして、人々とのコミュニケーションを通じた態度変容を企図したものである。その具体的な手段として「読書」に着目し、良き書物、所謂「良書」を通読することによって、個人ひとり一人の心に潜む大衆性が抑制される可能性を探ることとした。この方策は、個人に存する非自己閉塞的な側面、そして非傲慢的な側面に期待するものと捉えることが出来る。つまり、ある個人が、仮にわずかでも非自己閉塞的な側面をその精神の内に留めているならば、高潔な人生を描いた物語と、自らの人生を対比する可能性が幾ばくかでも生じるであろうし、わずかなりとも非傲慢的な側面を持ち合わせているのであれば、その対比の内に、自身の方が、その書物に描かれた高潔な人物よりも、「倫理的に劣る人生」を歩んでいる可能性について思いが至ることもあり得るものと考えられる。そして、彼がまさにこの点に達した時には、例えば認知的不協和理論<sup>15)</sup>が予測するように、万人が持ち合わせている「正しくありたい」という理想的な自己像への志向性に合致するべく、自身の種々の態度を改めようとする傾向がその精神の中の一つの動きとして生じることが期待されるのである。以上のように、幾ばくかでも非大衆的な要素を持ち合わせている人物ならば、書物に記された高潔な人物の物語を読了することは、その個人の内における大衆性が自発的に低減するという帰結がもたらされる可能性が考えられる。本研究においては、そうした方策の有効性を確認することによって、今後、大衆性抑制のための方途を検討するにあたっての基礎的な経験的知見を得ることとしたい。

## 2. 内村鑑三「代表的日本人」とその大衆性低減効果

それでは、大衆性抑制のための「良書」とはいかなるものであろうか。本研究では、そうした良書の具備すべき要件として、「貴族性」と「古典」という2つの点に

着目することとした。第一に、そうした良書の条件を探る上で、オルテガの提起した「貴族」なる概念が重要な指針を与えるものと思われる。オルテガは、人間の持つ最も根本的な心理的類型として、大衆と貴族という二つのタイプを定義した。すなわち、大衆とは「自分に対してなんら特別な要求を持たず、生きることが自分の既存の姿の瞬間的連続以外のなにもものでもなく、したがって自己完成への努力をしない人々 (p.18)」であり、他方、貴族とは「自らに多くを求め、進んで困難と義務を負わんとする人々 (p.17)」を表している<sup>13)</sup>。このオルテガによる心理的分類を踏まえれば、個人の大衆性を低減する上では、「大衆」と対置するところの「貴族」的な人物やその人生に触れることが効果的であると考えられる。したがって、良書の選定においては、そうした「貴族」的な人物を描いた書籍であるか否かという点が重要な基準となり得るものと考えられる。

第二に、人々において「古典」の通読が道徳心の向上に寄与するであろうことは、しばしば指摘されているところである<sup>18)</sup>。なぜなら、歴史的批判に耐えながら、あるべき価値判断の指針を示した「古典」を通読することにより、様々な価値葛藤の中で良識を養う術を学ぶとともに、より高徳なる価値への志向性が高まることが期待されるためである。ここで、大衆性の抑制を道徳心の醸成と言い換えることができるとするならば、古典の通読が人々において大衆性の抑制を促す可能性が少なからず期待されることとなる。

以上の2点から、「貴族的」および「古典（歴史）」という要素を含んだ書物こそ、本実験に最適な書物、すなわち「良書」であると考えられる。そこで、本実験では、そうした良書の「一つ」として、内村鑑三（1861-1930）による『代表的日本人』（岩波文庫、1995）を選定することとした。内村鑑三は、明治期の近代化に伴う混乱の中で、己の在り方をキリストへの恭順の中に見出し、神に対する己の在り方を模索し続けるとともに、日本人の在り方、そして、日本の在り方、さらには世界の在り方を問い続けた人物であったと言われている<sup>19)</sup>。そして、その著書『代表的日本人』とは、西郷隆盛、上杉鷹山、二宮尊徳、中江藤樹、日蓮上人の生涯を叙述し、彼らに宿る日本古来の道徳や倫理の高潔性を説いた啓蒙の書である。本書において内村は、西郷隆盛について、「純粋の意志力との関係が深く、道徳的な偉大さがある (p.49)」と論じている。次に、上杉鷹山について、「率直で高潔な人格 (p.74)」の持ち主であると評価し、二宮尊徳については、「真の貴人 (p.128)」であると評している。また、中江藤樹については、「高徳にして進歩的な思想家 (p.115)」であると称えている。最後に、日蓮上人については、「しんそこ誠実な人間、もっとも正直な人間、(中略)このうえなく勇敢な人間 (p.172)」

と評している。そして、本書においては、彼ら「代表的日本人」がその人生において経験した「困難」や「義務」、あるいは彼らの有する「義」や「徳」について多くの記述がさかれている。無論、ここに挙げた各人への評価は、あくまでも内村自身の所感であるが、少なくとも内村の目に映じた彼ら「代表的日本人」は、オルテガの論ずる「貴族」なる存在、すなわち「自らに多くを求め、進んで困難と義務を負わんとする」者に相違ないのではないかと思われる。

さらに、内村鑑三という人物自身についても、「政治や社会に対して妥協することをいっさい拒否」し<sup>19)</sup>、自己の内外に対して「非妥協的な戦いをつづけた」<sup>20)</sup> 姿勢を以って、その高潔性・高德性がしばしば指摘されているところであり、それはオルテガの論ずる貴族的なる姿勢、すなわち「われこそは他に優る者なりと信じ込んでいる僭越な人間ではなく、たとえ自力で達成しえなくても、他の人々以上に自分自身に対して、多くしかも高度な要求を課す (p. 17)」姿勢と同意義のものとして解釈できるものと思われる。また、内村は札幌農学校時代の学友である広井勇を始め、日本の近代土木における先駆者たちとの親交を通して、土木に対する理解を深めていたと言われており<sup>21)</sup>、事実、『代表的日本人』以外にも、同著「後世への最大遺物」(岩波文庫, 1946) などにおいて、土木事業に対する言及を多く確認することができる。そして、これらの記述に見られる内村の土木に対する理解と賛辞とは、その事業の困難さと、何より後世への献身に対してこそ与えられている評価であるように思われる。換言すれば、内村は、土木という営為の中に、自己に対して困難と義務を強いるという「貴族」的な態度を見出し、そのことに対してこそ評価を与えているのである。ここにおいてもなお、内村自身の貴族性が窺えるのであり、本書『代表的日本人』が、登場人物ばかりでなく、著者自身の資質によっても、「貴族的」要素を備えたものであることが認められるものと考えられる。

一方、「古典(歴史)」なる要素は、その歴史(伝記)的著述の内容をもって当然担保されるものと考えられる。

以上より、内村鑑三『代表的日本人』は、大衆性低減に寄与し得る良書の備えるべき2つの要件である「貴族性」と「古典」の双方を満たす「一つ」の書籍であると考えられる。そして以上の論考より、内村鑑三『代表的日本人』の通読と人々における大衆性との関連性について、以下のような「作業仮説」を指定することができるものと考えられる。

#### 作業仮説

内村鑑三『代表的日本人』を通読することによって、人々の大衆性が低減する。

本研究では、以上の仮説を検証し、大衆性低減策の一つとして、内村鑑三『代表的日本人』通読の有効性について確認することとしたい。

なお、言うまでもなく、『代表的日本人』以外にも、本研究の仮説を検証するために相応しい書籍が存在しているであろうものと考えられるところである。それ故、先の“作業仮説”の根底にある、「良書の通読による大衆性低減効果」についての“理論仮説”を検証するためには、そうしたそれら以外の書籍を用いた検証を行うことが必要であると考えられる。それ故、本稿は、そうした理論仮説を検証するための第一歩としての一実験を報告するものとして位置づけることができる。

### 3. 実験概要

#### (1) 実験参加者

本研究では、以上の仮説を検証するため、東京工業大学の学生を対象とし、2回のアンケート調査からなる実験を実施した。まず、東京工業大学構内にて実験協力者募集を旨としたチラシを配布し、第1回調査については300名の参加者を得た。その後、こちらで指定した書籍の通読を依頼し、第2回調査を実施したところ、最終的な実験参加者124名を得た。そのうち、97人が男性(78%)、27人が女性(22%)であり、その平均年齢は20.60歳、年齢標準偏差は1.93歳であった。

#### (2) 実験手順

東京工業大学構内において、300人の実験参加者を一つの会場に集め、第1回アンケート調査を実施した。第1回アンケート調査の後に、実験参加者を無作為に実験群と制御群の2グループに分類し、実験群に対して内村鑑三著の『代表的日本人』、制御群に対して神田敏晶著の『YouTube革命』(ソフトバンク新書, 2006)の通読を依頼した。なお、本実験では、『代表的日本人』通読による効果をより明確に検証するために、制御群に対して、個人の価値観や人格に出来るだけ影響を及ぼさないような書籍を読んでもらうことを考え、『YouTube革命』を選定することとした。本書は、YouTubeの性能やサイトを中心に生じている諸現象について述べており、YouTubeやインターネット、メディアに対する認識については、読者に影響を与え得るものであるが、本研究で対象とするような、個人の人格や価値観に対しては、大きな影響は及ぼさないものと考えられる。

上記の書籍通読を依頼した約2週間後に、第2回アンケート調査を実施し、書籍通読の効果を測定した(第2回調査も第1回調査と同一の会場にて行った)。なお、実験参加者の書籍通読の有無を確認するために、第2回

アンケートの際に、実験群、制御群に対して、通読を要請した書籍の内容に関する質問項目を5問ずつ設けた。いずれの質問項目も、通読において実験参加者の印象に残りやすいと思われるエピソードや単語を中心に、書籍の内容をほぼそのままに反映するよう留意したが、実験参加者ごとに通読の時期に若干の差異のあることや、書籍の内容自体がやや複雑であったことなどを考慮して、質問5項目に対し、実験群、制御群共に2問以上の正解者を有効回答者と見なすこととした。この判定により、第2回アンケート調査の有効回答者は、実験群について71人(91%)、制御群について41人(89%)の計112人となった。この内、男性は90人(80%)、女性は22人(20%)であり、平均年齢は20.67歳、年齢標準偏差は1.96歳であった。

### (3) 調査項目

本実験では2. で措定した仮説を検証するために、大衆性指標を測るための質問項目として、先行研究<sup>9)</sup>で提案された大衆性尺度を用いて、表-1に示すような2因子(傲慢性、自己閉塞性)19項目の質問を設定し、各項目について「とてもそう思う」から「全く思わない」の7件法で回答を要請した。ここで、傲慢性は、自分自身や社会等の種々の対象に対する自らの制御能力に関する過大な評価に関わる質問項目から、一方、自己閉塞性は、外部世界に対する関心および外部世界との紐帯やその中での責務に関わる質問項目から構成される。なお、本実験では、各尺度の信頼性分析の結果、傲慢性尺度について、「No.8 日本が将来なくなる可能性は、皆無ではないと思う」、自己閉塞性尺度について、「No.18 もし

表-1 大衆性尺度項目

「傲慢性」尺度 (α=.63)	
1	自分を拘束するのは自分だけだと思う
2	自分の意見が誤っている事などない、と思う
3	私は、どんな時でも勝ち続けるのではないかと、何となく思う
4	自分個人の「好み」が社会に反映されるべきだと思う
5	どんなときも自分を信じて、他人の言葉などに耳を貸すべきではない、と思う
6	「ものの道理」には、あまり興味がない
7	物事の背景にあることには、あまり興味がない
8	日本が将来なくなる可能性は、皆無ではないと思う*
9	世の中の問題は、技術ですべて解決できると思う
10	人は人、自分は自分、だと思ふ
11	自分のことを、自分以外のものに委ねることは一切許されないとだと思ふ
12	道徳や倫理などというものから自由に生きていたいと思ふ
「自己閉塞性」尺度 (α=.64)	
13	伝統的な事柄に対して敬意・配慮をもっている*
14	日々の日常生活は感謝すべき対象で満たされている*
15	世の中は驚きに満ちていると感じる*
16	我々には、伝統を受け継ぎ、改良を加え、伝承していく義務があると思ふ*
17	自分自身への要求が多いほうだ*
18	もしも奉仕すべき対象がなくなれば、生きている意味がなくなるのではないかと思ふ*
19	自分は進んで義務や困難を負う方だ*

α: クロンバックの信頼性係数, \*逆転項目

も奉仕すべき対象がなくなれば、生きている意味がなくなるのではないかと思う」の項目を除外し、「傲慢性」尺度については対応する11項目の加算平均から、「自己閉塞性」尺度については対応する6項目のそれぞれを反転した上で求められる加算平均から、それぞれの尺度を構成した。それぞれの尺度のα係数を算出したところ、「傲慢性」についてはα=.63、「自己閉塞性」についてはα=.64であった。α係数がやや低いものの、一定程度の信頼性が認められたため、これらの尺度を採用することとした。なお、「大衆性尺度」はこれらの二つの下位尺度の加算により算出した。

## 4. 結果と考察

書籍通読の前後(事前:第1回,事後:第2回)の両群における大衆性得点,傲慢性得点,及び自己閉塞性得点の平均値の変化を表-2,図-1~3に示す。この図表より、大衆性と傲慢性について、制御群に比べて実験群の方が、書籍通読によりその平均得点がより大きく低下している傾向を確認することが出来る。一方、自己閉塞性については、両群の間で、それほど大きな相違は確認されなかった。この結果を踏まえ、『代表的日本人』の通読が個人の大衆性に及ぼす影響について検証するために、事前・事後のそれぞれの尺度について、2(事前 vs. 事後)×2(実験群 vs. 制御群)の反復測定分散分析を行った。その結果、傲慢性の変化について、両要因の交互作用(事前/事後×実験群/制御群)が有意となり(F(1, 109) = 2.81, p = .097)、『代表的日本人』を読んだ実験参加者において、『You Tube 革命』を読んだ実験参加者よりも、一般にその傲慢性が抑制されるという傾向が示された。この結果は、少なくとも通読直後(約2週間)においては、「内村鑑三『代表的日本人』を通読することによって、人々の傲慢性が低減する」可能性を示しており、大衆性を構成する傲慢性について、本実験の仮説を部分的に支持するものと言える。

表-2 両群における各尺度得点の変化

	実験群 (n=71)			
	第1回	第2回	変化	変化のt値とp値
大衆性	3.07	3.01	-0.05	t=-1.41 p=.162
傲慢性	3.02	2.90	-0.12	t=-2.08 p=.041
自己閉塞性	3.14	3.22	0.07	t=1.08 p=.283
	制御群 (n=41)			
	第1回	第3回	変化	変化のt値とp値
大衆性	3.16	3.21	0.04	t=0.68 p=.500
傲慢性	3.00	3.03	0.03	t=0.45 p=.653
自己閉塞性	3.46	3.53	0.06	t=0.52 p=.608

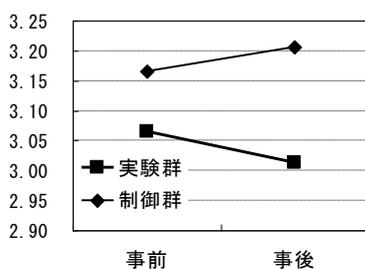


図-1 大衆性得点の変化

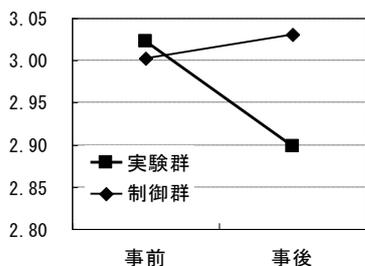


図-2 傲慢性得点の変化

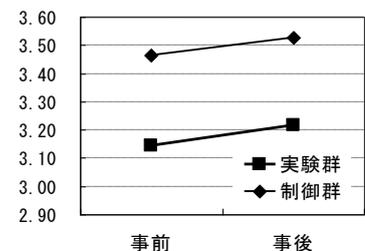


図-3 自己閉塞性得点の変化

さて、先行研究<sup>14)</sup>では、オルテガの論ずる大衆性は「傲慢性と自己閉塞性を併せ持つ存在」とであると指摘されている。この想定は、両尺度の相関が有意に正であるという本研究の実験データ ( $r=.157, p=.006$ ) によっても、経験的に裏付けられているところである。その点を踏まえれば、『代表的日本人』を通読した人において、大衆性を構成する傲慢性が抑制されるという本実験の結果は、本書籍の通読が、部分的なものであるにせよ、大衆性の抑制に寄与する方向に働く可能性を示唆するものであると理論的に解釈できる。また、このことは、本実験において大衆性を抑制するための「良書」として、内村鑑三『代表的日本人』を選定したことに一定の妥当性が存在することを示唆する結果であるとも解釈できる。

なお、先行研究<sup>22)</sup>において、幼少期の生活環境が、大衆性の形成に影響を及ぼす可能性が指摘されている。ただし、この知見は、人々の大衆性が過去の経験に由来していることを示すものであり、既に成人している人々に対する大衆性抑制の方途を考える上では、必ずしも十分なものではなかったと言える。この点において、「良書」の通読が「成人」の大衆性の抑制に寄与する可能性を示した本実験の意義は少なくないものと考えられる。今後

大衆性抑制の方途について更なる検討を進めるにあたっては、本研究で得られた知見を踏まえつつ、大衆性抑制の効果を規定する要因の抽出を試みることにより、一層の効果を期待し得るコミュニケーション手法の検討を行うことが重要であろう。

最後に、本実験は大学生のみを対象としており、言うまでもなく、本研究の仮説についてより一般的な知見を得るためには、今後、一般の成人を対象とした実験を実施することが重要である。同様に、本稿で取り上げた書籍以外の「良書」による検証を行うことも、必要であると完結なえられる。ただし、本研究の理論仮説が真でないとすれば、仮に大学生サンプルであったとしても、そして、良書の一つであるところの『代表的日本人』を活用した実験であったとしても、その仮説を支持“しない”データが得られるであろうことが予想されるところである。それ故、本実験データを用いた仮説検証にも、一定の経験的妥当性が存在するものと思われる。ただし、繰り返すとなるが、本研究で提案した仮説の真偽をより厳密に確認するためには、今後より広範なサンプルや異なる実験条件を用いた仮説検証が必要となることは言うまでもない。その意味において、先に述べたとおり、本報告は、そうした研究の第一歩と位置づけられるであろう。

## 注

[1] 土木計画にまつわる数多くの論文・書籍の中において、直接に「道徳心の低下」を論じているものは筆者らの知る限りでは見当たらない。しかし、例えば藤井<sup>1)</sup>が交通問題の漸次的且つ本質的解決にあたり、人々の「公共心」を強く重視していることは、現在の一般の公共心は「向上すべきである」という認識の一つの表出であり、その背景には「道徳心の低下」への危惧があると解釈できる。筆者においては、これを「道徳心の低下への懸念」と表現したものである。

## 参考文献

- 1) 藤井聡：TDM と社会的ジレンマ交通問題解消における公共心の役割一，土木学会論文集，No.667/IV-50，pp.41-58，2001.
- 2) 森川高行，田中小百合，萩野成康：社会的相互作用を取り入れた個人選択モデル - 自動車利用自粛行動への適用 - ，土木学会論文集，No.569/IV，pp.53-66，1997.
- 3) 三木谷智，羽鳥剛史，藤井聡：心理的方略による放置自転車削減施策に関する実証的研究 - 東急電鉄東横線都立大学駅における取り組み - ，第37回土木計画学発表論文集，2008
- 4) 田中尚人，柴田久（編）：土木と景観—風景のためのデザインとマネジメント—，学芸出版，2007.
- 5) 柴田久，土肥真人：目的別研究系譜からみた景観論の変遷に関する一考察，土木学会論文集，No.674/IV-51，pp.99-111，

- 2001.
- 6) 藤井聡：総論賛成・各論反対のジレンマ，In：土木学会誌編集委員会（編）：合意形成論—総論賛成・各論反対のジレンマ—，土木学会，pp.31-45，2004.
- 7) 藤井聡：「決め方」と合意形成：社会的ジレンマにおける利己的動機の抑制に向けて，土木学会論文集，No.709/IV-56,pp.13-26.2002.
- 8) セーレン・キルケゴール：現代の批評（1846年刊），キルケゴール 死に至る病・現代の批評（榊田啓三郎 訳），中央公論新社，2003.
- 9) ニーチェ：権力への意思（上・下），ニーチェ全集 12（原佑 訳），ちくま学芸文庫，1993.
- 10) ハイデッガー：技術論（1962）ハイデッガー選集 18，（小島威彦，・アルムブルスター共訳），理想社，1965.
- 11) 山田竜作：大衆社会とデモクラシー - 大衆・階級・市民，風行社，2004.
- 12) Tuttle, H. N. : The crowd is untruth: The existential critique of mass society in the thought of Kierkegaard, Nietzsche, Heidegger, and Ortega y Gasset. New York: Peter Lang., 1996.
- 13) ホセ・オルテガ・イ・ガセット：大衆の反逆（1930），（神吉敬三 訳），ちくま学芸文庫，1995.
- 14) 羽鳥剛史・小松佳弘・藤井聡：大衆性尺度の構成についての研究—Ortega “大衆の反逆” に基づく大衆の心的構造分析—，心理学研究，79（5），2008(印刷中).
- 15) 羽鳥剛史・小松佳弘・藤井聡：政府に対する大衆の反逆—公共事業合意形成に及ぼす大衆性の否定的影響についての実証的研究—，土木計画学研究・論文集，25，pp.37-48，2008.
- 16) 小松佳弘・羽鳥剛史・藤井聡：大衆による風景破壊：オルテガ「大衆の反逆」の景観問題への示唆，景観マネジメント論文集，2008(投稿中).
- 17) Festinger, L.: A theory of cognitive dissonance. Evanston, IL: Row, Peterson. (末永俊郎（監訳） 認知的不協和の理論，誠信書房，1965)，1957.
- 18) 西部邁：国民の道徳，編/新しい歴史教科書をつくる会，産経新聞社，2000.
- 19) 隅谷三喜男：内村鑑三と現代—座標軸をもつ思想—，世界，岩波書店，No.422，pp.54—66，1981.
- 20) 亀井勝一郎：内村鑑三—近代日本精神史におけるその位置と特徴— 現代日本思想体系第 5 巻内村鑑三，筑摩書房，pp.7—41，1963.
- 21) 高崎哲郎：内村鑑三「後世への最大遺物」を読む，土木学会誌，（社）土木学会，Vol.92-12，p.62，2007.
- 22) 藤井聡・羽鳥剛史・小松佳弘：オルテガ「大衆の反逆」論についての実証的検討，第 48 回社会心理学会論文集，pp.120-121，2007.

(? 受付)

## A REPORT ON THE EFFECTS OF EXPERIMENT READING “REPRESENTATIVE MEN OF JAPAN” BY KANZO UCHIMURA ON REDUCTION OF THE VULGARITY OF THE MASS

Kyosuke IJICHI, Tsuyoshi HATORI and Satoshi FUJII

The authors' past study developed a scale measuring the spiritual vulgarity of the masses, based upon Ortega's "The Revolt of the Masses" (1930). The study indicated that the vulgarity of the masses might have a negative impact on urban landscape and consensus building around public works. In the present report, given with the previous results, we aimed to explore an effective measure for reducing one's vulgar disposition. For this purpose, we focused on the classic book "Representative Men of Japan" by Kanzo Uchimura and hypothesized that reading this book might reduce the vulgarity of the masses. To test this hypothesis, we conducted an experiment in which we asked participants to read the book and examined the reading effects on the reduction of the spiritual vulgarity. The obtained data statically supported the hypothesis, thus indicating the potential of the book as a relevant measure for reducing the vulgarity.